

論 説

三間隆次のみた 万国書籍印刷業博覧会（BUGRA）（一）

梶 原 克 彦

目 次

はじめに

1. BUGRA の概要（以上本号）

2. 三間隆次と「万国印刷展覧会巡覧記」

おわりに

は じ め に

1914 年に第一次世界大戦が勃発した時、ドイツには留学や商用などで約 450 名の日本人が在留していた。欧州情勢の急速な悪化に直面してすぐさま帰国の途についた者もいたが、多くの日本人は 8 月 15 日に日本がドイツに対して最後通牒を出したのちに「脱出」をおこなった。8 月 23 日に日独は交戦状態に入り、ドイツの在留日本人は敵国人となったが、これに前後して日本人の民間人がドイツ各地で逮捕・拘禁され、中には数カ月にも互る事態も生じた。日本人の抑留者に対する処遇は各地でまちまちであり、厚遇を受けた者もあれば、粗末な食事しか与えられず、さらには労働を強いられた者もいた。また収容された施設も、留置所や刑務所といったようなものから、急ごしらえの収容所まで様々であった。

こうした各地の抑留場所のなかで、ザクセン王国では比較的多くの日本人が抑留されており、ライプツィヒでも逮捕・拘禁が行われた。ライプツィヒはドレスデンと並ぶザクセン王国の中心地であり、学術・芸術の都市であると同時にメッセ（見本市）の開催で知られる商工業の街であった。同地に在留した日本人の主たる目的も留学や商用だったと思われるが、第一次世界大戦勃発前には、万国書籍印刷業博覧会（BUGRA：Internationale Ausstellung für Buchgewerbe und Graphik）が同地で開催され、その協力者として滞在したり、博覧会を訪問したり、といった日本人もいた。そのうちの一人に、東京の三間印刷所の社主だった三間隆次がいた。三間はBUGRAの視察を通じて新たな印刷機械の導入や製版技術等の研究を行っており、開戦当時もライプツィヒに逗留し、BUGRAの見学をしていた。風雲急を告げるなかで三間一行はベルリンへ移動し、そこからさらに一行の拠点としていたハイデルベルクへ帰ったところで、現地警察による保護検束を受けることになった。

解放後、三間はそうした抑留体験を「無法野蛮の独逸官憲」という小論にまとめて『欧州戦争実記』でつまびらかにすると同時に、訪独の目的の一つであったBUGRAの様子については、「万国印刷展覧会巡覧記」という小編を『日本印刷界』に寄稿した。三間と大戦時の抑留については、筆者の梶原と奈良岡聰智が「第一次世界大戦と在独日本人の抑留問題（三）」において採り上げ、三間の安否確認に関する史料や、上記三間の小論、新聞での報道を瞥見し、その状況を解明した。一方、三間と印刷業とのかかわりについては、梶原・奈良岡論文の他に、石田善通「グラビア印刷時代の草分け時代『この道こそ』」¹⁾、中谷哲司「『日本大観京都巻』所収、三間印刷所の広告」²⁾、藤田麻希「大正期美術印刷の権威 三間印刷所に関する報告」³⁾が明らかにしているが、三間がBUGRAで何を観て、どのような感想を抱いたのかという点については、梶原・奈良岡論文で若干の言及はあるものの、詳細は分かっていない。ところでBUGRAは同時代にあっては、世界から多くの人々が訪れ、日本でもその開催が報じられていたように、注目を集めた一大イベントであったものの、第一次世界大戦の勃発により「忘れられた存在」となっていた。先行研究としては、パール⁴⁾が

オーストリアの出版・印刷業の歴史を明らかにする中で BUGRA に触れている他に、フィッシャーとヤコブスの編になる『ライプツィヒにおける世界：BUGRA 1914』⁵⁾ が最も詳細に検討している。後者は開催に至る経緯から時代状況、様々な施設や展示物の様子を明らかにしているが、三間が言及している日本関係の展示についての情報には乏しい。本稿では、以上の状況に鑑みながら、三間の BUGRA 体験を明らかにし、書籍・印刷技術だけでなく、第一次世界大戦勃発時における「日本」や各国の表象の在り方を辿っていきたい。

1. BUGRA の概要

BUGRA は 1914 年 5 月 6 日にザクセン王フリードリッヒ＝アウグスト 3 世の臨御を仰ぎ開幕し、同年秋まで開催された⁶⁾。会場はライプツィヒの南東部のトンベルク（Thonberg）に設置された。40 万平方メートル（東京ドーム約 8.5 個分）の敷地は、前年に万国建築博覧会（Internationale Baufach-Ausstellung）が行われた場所であり、そのいくつかの施設の流用が可能であった事⁷⁾ また前年に除幕した「諸国民戦争記念碑」（Völkerschlachtdenkaml）を起点とする「10 月 18 日通り」が延びるエリアであり、記念碑を含めた地区開発の動きに乗った事、これらをはじめとした理由から同地で開催されることとなった。

来訪者は世紀転換期に実施された数々の万国博覧会に比べると及ぶべくもないが、最初の 3 か月で 200 万人が訪問し、最終的には 230 万人を数える盛況ぶりであった。日本人も欧州に滞在していた者たちを中心に BUGRA を訪れた様子が窺え、例えば、ウィーンに留学していた柴一雄（農商務省・海外実業練習生）もその旨認めており⁸⁾ ドイツ在留中の大関久五郎（東京高等師範学校・教授）が三宅米吉（同教授、帝国帝室博物館歴史課長など）へ宛てた手紙のなかでも同地を訪れたことが記されていた⁹⁾。しかし第一次世界大戦が勃発したことで、入場者の数は目に見えて減少し、また敵国となったロシア、イギリス、フランス、ベルギー、日本の展示は閉鎖された¹⁰⁾。第一次世界大戦の影響はこれに留まらず、こうした敵国の陳列館が火災で焼失する事態にまで発展した¹¹⁾。その

結果、多くの価値ある美術品も失われたとあり、これを報じた『読売新聞』では「何にせよ、各国否、世界の損害は大したものである。その金高は兎に角として、再び得られないものも多かつたらうに。戦争に熱狂せる国民の余憤とは云ひ条、学芸を尊重する常の独逸人には似合しからぬ事である」とのコメントを付している¹²⁾ BUGRA 閉幕後には敷地内で軍事訓練も行われたように、第一次世界大戦は文化の祭典にその影響を終了後も色濃く留めることになった。

とまれ大戦勃発に先立つ期間には、のちに交戦国となる諸国が展示に加わっていた。ドイツからは2,300の企業・個人が参加し、ドイツの過去と現在における書籍と印刷に関わる内容が紹介された。ドイツの他にも、オーストリア、イギリス、フランス、イタリア、ロシア、ベルギー、オランダ、デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、ポルトガル、スペイン、シャム、中国、日本など22カ国から出品があり、書籍・印刷物はもちろんのこと、印刷技術が伝わる以前の書物や文字資料など、人類と文字・書籍の世界史がライブツィヒに再現

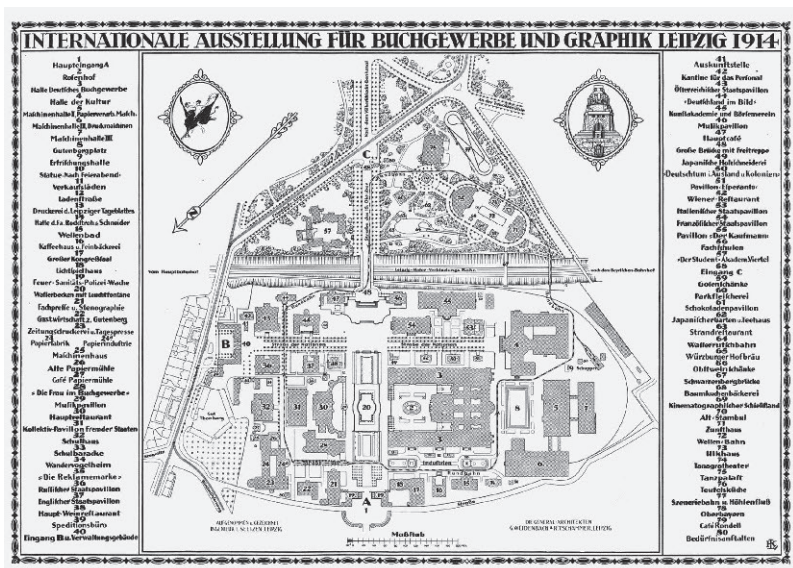


図1 BUGRA 案内図 (出典：Fischer und Jacobs, *Die Welt in Leipzig*)

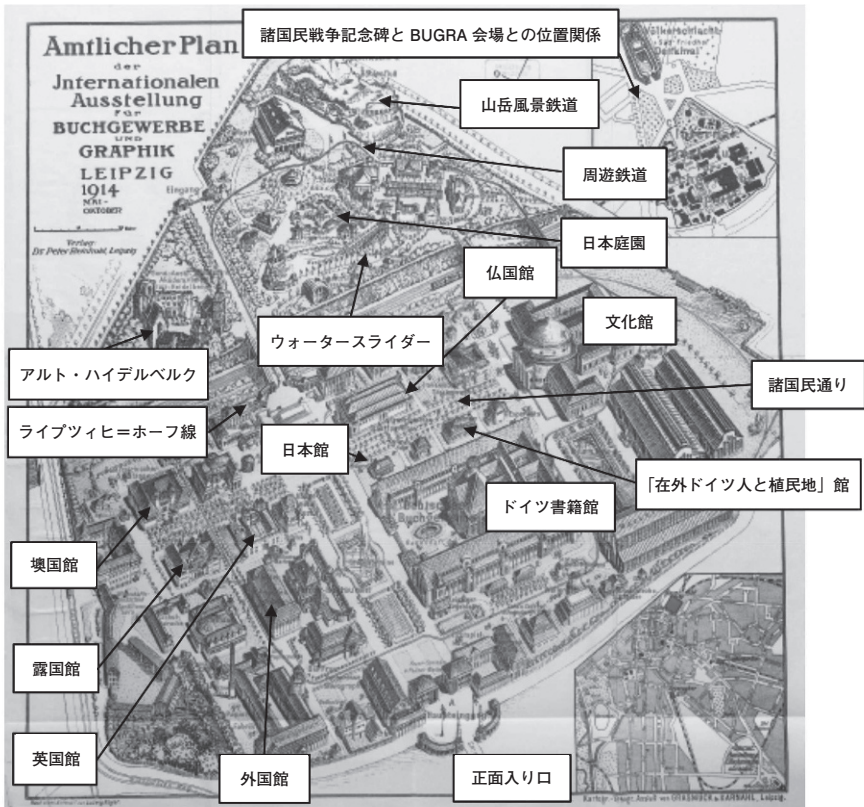


図2 BUGRA 公式地図（出典：Amtlicher Katalog：Internationale Ausstellung für Buchgewerbe und Graphik Leipzig, 1914）

されることになった。

BUGRA の会場は展示エリアと娯楽エリアとで大きく分れている。図1はBUGRA の案内図であり、施設の配置を示している。案内図の真ん中に十字に交わるラインが見えるが、この縦に延びるラインの下端（Aとあるところ）が正面入り口である（図3）。上部のCは南東の入口を指しており、ここを通過しているのが「10月18日通り」で、その延長線上に「諸国民戦争記念碑」がある（図2の右斜め上で位置関係が示されている）。案内図の真ん中で横に走っ



図3 正面入り口（奥に見えるのは諸国民戦争記念碑）

（出典：Erinnerung an die Weltausstellung für Buchgewerbe und Graphik, Leipzig, 1914）

ているラインはライプツィヒとバイエルンのホーフを結ぶ鉄道路線である。この線路より上部（入口Cのゾーン）が娯楽エリアで、各種カフェやレストラン、茶室を備えた日本庭園¹³⁾（図4）、ビアホール、ソーセージ販売精肉店といった飲食施設や、ウォータースライダー（図5）や山岳風景を走る軽便鉄道（図6）などの娯楽施設を有するアミューズメントパークとなっていた。また「10月18日通り」の左側にあるエリアでは、特別展示「学生」が催されており、ハイデルベルク城の「オットー・ハインリヒ館」「時計塔」「フリードリヒ館」などが模造されていた（図7）。娯楽エリアと展示エリアは、ライプツィヒ＝ホーフ線に架かる二つの橋で結ばれており、両エリアを周遊する軽便鉄道（Rundbahn）も運行されていた（図8）。

正面入り口から展示エリアへ入ると正面奥に諸国民戦争記念碑が見える。娯楽エリアへと続くメインロードの右手にあるのがドイツ書籍館であり、BUGRA



図4 日本庭園（出典：Lothar Poethe, *Bugra-Ansichten : Historische Bilder der Internationalen Ausstellung für Buchgewerbe und Graphik Leipzig 1914*, H. C. Schmiedicke, 1988.）



図5 ウォータースライダー（左奥に見えるのはアルト・ハイデルベルク）
（出典：Erinnerung an die Weltausstellung）



図6 山岳風景鉄道とオーバーバイエルン・レストラン
(奥に見えるのは諸国民戦争記念碑) (出典：ibid.)



図7 アルト・ハイデルベルク (出典：ibid.)

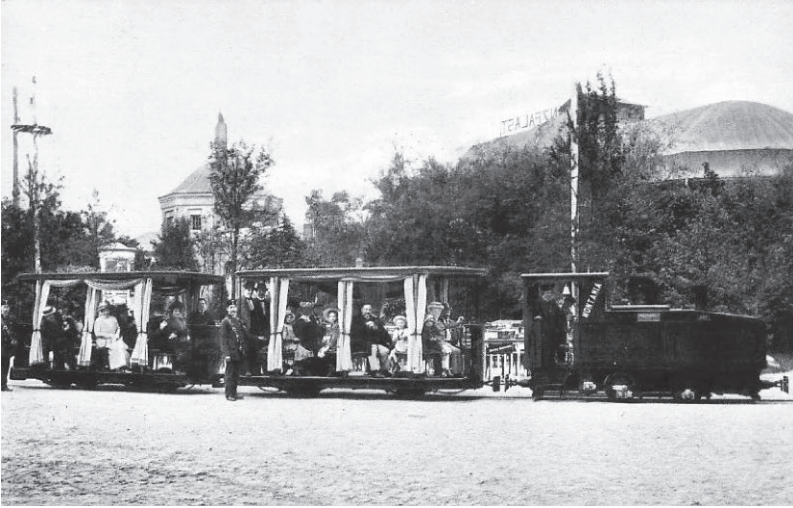


図8 周遊鉄道（出典：Poethe, op. cit.）

最大の施設である（図9）。メインロードを挟んでドイツ書籍館の向かい側にはレストランがあり、その裏手に外国館（Kollektiv-Pavillon fremder Staaten）がある（図10）。外国館は、オランダ、スイス、ベルギー、デンマーク、スウェーデン、スペインの共同展示館であり、各国ごとに展示スペースを設けている。メインロードは、娯楽エリアと展示エリアを結ぶ陸橋に接続するその手前で、「諸国民通り」と交差する（図11）。「諸国民通り」は北東から南西に延びており、通り沿いにはオーストリア（図12）、ロシア（図13）、イギリス（図14）、フランス（図15）、イタリア（図16）のパビリオンが立ち並ぶ。その他、日本館（図17）では「多くの日本の芸術家による木版画が展示されており、建物の一部では日本の版画作品が販売¹⁴⁾」されていた。また日本館の並びには、「在外ドイツ人と植民地」館¹⁵⁾（図18）、エスペラント館などが続き、南西の端には文化館があった。文化館はライプツィヒ大学教授で文化史家であったカール・ランプレヒトが展示の指揮を執っており、文化史・普遍史のコンセプトに基づき、芸術作品と写真の他に、文字の発明から出版・印刷技術の発展に至る



図9 ドイツ書籍館 (出典： *Erinnerung an die Weltausstellung*)



図10 外国館 (出典： *ibid.*)



図 11 諸国民通り（右奥は文化館）（出典：ibid.）



図 12 奥国館（出典：ibid.）



図 13 露国館 (出典：ibid.)



図 14 英国館 (出典：ibid.)



図 15 仏国館（出典：ibid.）



図 16 伊国館（出典：ibid.）

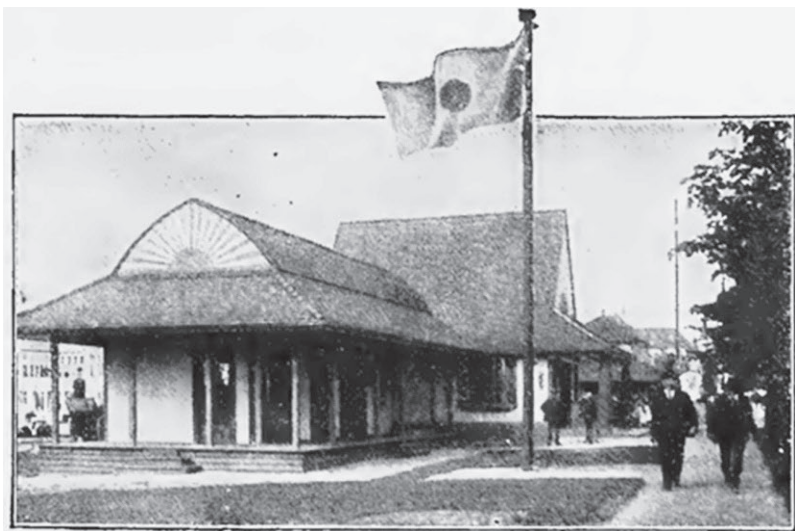


図 17 日本館（出典：Amtlicher Führer durch die Internationale Ausstellung für Buchgewerbe und Graphik Leipzig 1914）



図 18 「在外ドイツ人と植民地」館（出典：Erinnerung an die Weltausstellung）

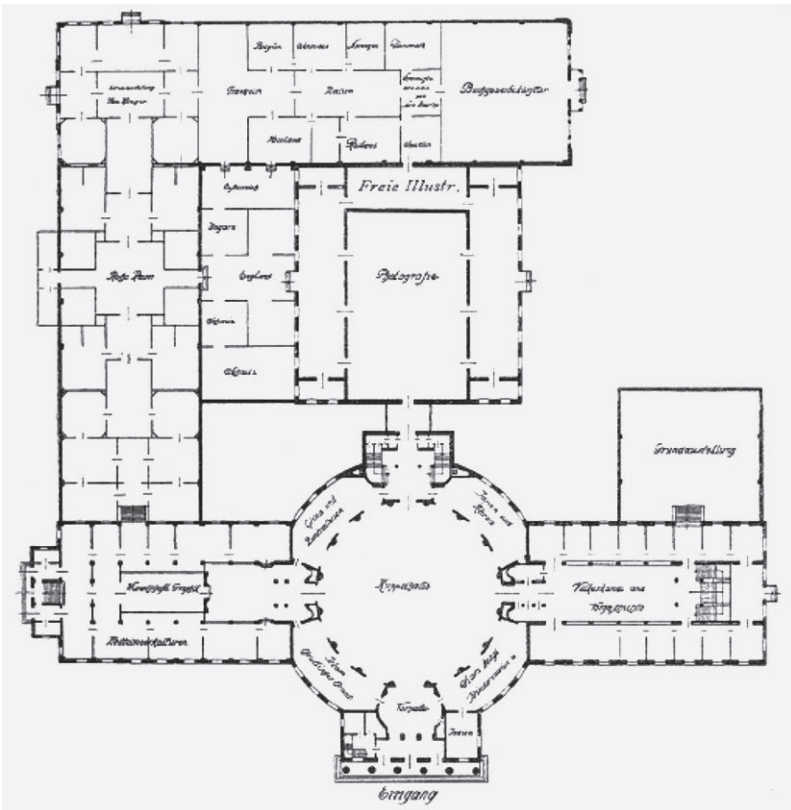


図 19 文化館平面図（出典：Amtlicher Führer durch die Internationale Ausstellung für Buchgewerbe und Graphik Leipzig 1914）

歴史や民俗学上の知見が、世界の様々な地域にわたって展示された。ドーム屋根下のエントランスホールは日本、朝鮮、中国、シャムの展示スペースとなっており、日本部門では「展示物に加えて歓迎のために、1790年頃の江戸における歌麿の版元が立体設置⁶⁾」されていた(図19)。

これらの展示に加えて、紙や印刷機械といった出版・印刷業に関わる展示（機械館Ⅰ：紙加工、機械館Ⅱ：印刷用機械〔図20〕、製紙産業館〔図21〕、ハインスブルグの水車製紙工場〔図22〕）や、商業に関する展示（商人館〔図23〕）、



図 20 機械館Ⅱ（印刷機械。奥に見えるのが機械館Ⅰ）
（出典：Erinnerung an die Weltausstellung）

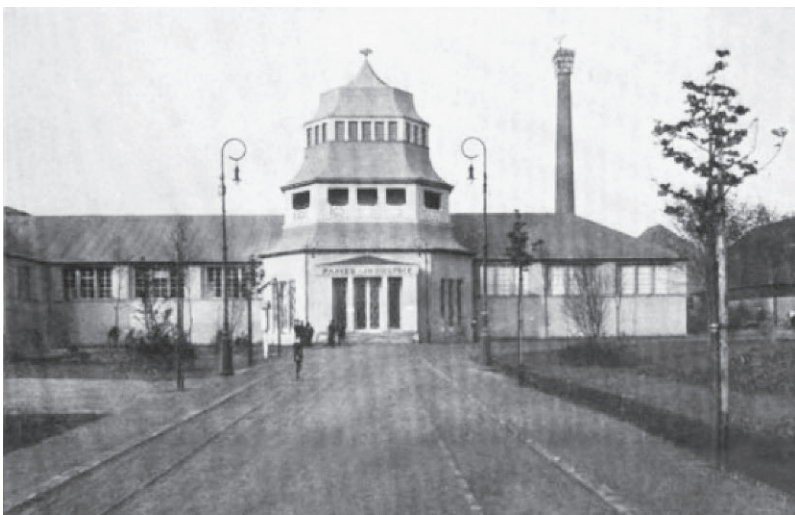


図 21 製紙産業館（出典：ibid.）

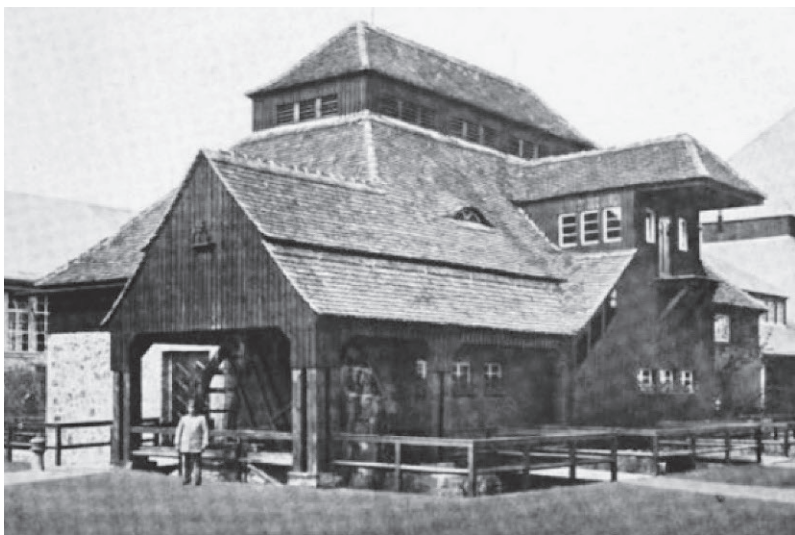


図 22 ハインスブルグの水車製紙工場（出典：ibid.）



図 23 商人館（出典：ibid.）

児童や女性に関わる特別展示（「子どもと学校」〔図 24〕、女性館〔図 25〕）も行われていた。趣向を凝らした様々な展示を子細に紹介することは別稿に譲るとして、ここでは同時代の説明を紹介したい。

敷地は半哩四方で四十の建物から成つてゐる。而してその中には十六カ国から出品されてゐる。各国各様の建築様式によつたので、建物の様式は均一でないが、各国民性を表現して、何れも適当な建物に出来てゐる。殊に英吉利と露西亜とが変つてゐる。瑞西、ネザーランド、丁抹、瑞典、ノルウェー那 威及び西班牙は一大別館に陳列されてゐて、和蘭の出品中には一冊二百四十円の立派な印刷の書物があり、塙地利には一四八二年の最古の維納の木版があるが、殊に吾々の注意を惹くのは英吉利の出品である。その沙翁物の中最も面白いものは倫敦駐在の支那大使から借入れた「ハムレット」の漢訳で、其他沙翁の第一版や、五百の真珠とルビーを鏤めた非常に立派な「ロミオとジュリエット」の草稿がある。この草稿一冊を綴るに或る職工は二年を費し、健康を害したと云ふ事である。その価格は実に一萬二千円、蓋し現存せる走行中最も立派なものであらう。尚ビアーズレーの原画一枚五百円宛のものが二十枚陳列されてゐる。此外にバイロン、リビングストン、スコット、サツカリイ等の自筆が多く出陳されてゐる¹⁷⁾

各館共国によつて同じ様な出品をして居るが「修養館¹⁸⁾」はこれと稍趣を異にしてゐる。即ち写真術によつて文明の進歩を現したもので、全博覧会中最も見るべき特相とされてゐる。象形文字は紀元前二千九百年頃から見られ、上は石に彫んだテーベの公文書から、石器時代黃銅時代、降つて鉄器時代の絵に至るまで、地理的記述的民族学の教ふる処に従つて排列してゐる。各種の写真には驚く程余地を与え、素人及び写真家の芸術的作品が多く見られる。天然色写真も亦大したものである。或る一部には各国の現代美術が展覧されてゐる。それは素描エツチングに限りドレスデンのガルリイ・アルノルドから借りたブランギンの傑作や、マックス・クリンゲ



図 24 「子どもと学校」（出典：ibid.）



図 25 女性館（出典：ibid.）

ル、イスラエル其他の人の作が出してある。ギユビズム、フューチュリズムは失敬してあるらしい。機械館は他の静寂なるに反して、機械の運転を示して喧囂を極めてゐる。此他幾多の特筆すべきものも多いが、先づそれらは省略に従ふとして、唯一つ注意すべき現象を書いて置かう。それは諸方面の会場中最後の一棟で婦人館である。すべて婦人の作を以て満し、建物も伯林の或る婦人建築家の設計になり、内部の整理及び意匠等も皆悉く婦人の考案によつてゐる。その一部では、中世紀以前にさへ婦人が著述や製本に従事してゐた事を、僧院や博物館から借て来た貴重な書類であらはいし他の一部では婦人の写真術に於ける技術の進歩を明示してある。また或処には最近に於ける女流文学者の作を集めて「文学上の婦人」と題してある。同様に音楽の方面を示してあるが、云ふ迄もなく写真術がその大部分を占めてゐる。他に刺繍や家具衣服の意匠、手工並に機械によつた美麗なる製本が見られる。それから其処には茶室もあると云ふことである。兎に角婦人の権利を認めて一部にその威厳と価値とを表示せしめたのは面白い企てと云はねばなるまい¹⁹⁾

【追記】本稿は、愛媛大学リサーチユニット「グローバル地域研究」(GLOCAS)、科学研究費・挑戦的研究(萌芽)「近代日本の捕虜処遇と大正・昭和初期におけるその変容に関する政治史的考察」(研究課題番号:21K18418, 研究代表者:梶原克彦, 2021年度~2023年度)、科学研究費・基盤研究(B)「国際比較に基づく日本の総力戦体制の全体像の解明(1918-1945)」(研究課題番号:21H00681, 研究代表者:森靖夫, 2021年度~2023年度)、による研究成果の一部である。

注

- 1) 石田善通「グラビア印刷時代の草分け時代『この道こそ』」(「印刷図書館:印刷史談会」13, 「ぷりんとびあの小箱」一般財団法人印刷図書館ホームページ (https://www.jpfi.or.jp/files/user/pdf/printpia/pdf_part3_01/part3_01_013.pdf) 最終確認, 2021年11月25日。
- 2) 中谷哲司『『日本大観京都巻』所収, 三間印刷所の広告』『天理参考館報』22, 2009年。
- 3) 藤田麻希「大正期美術印刷の権威 三間印刷所に関する報告」『Bandy』(明治学院大学文学研究科芸術学専攻紀要)第10号, 2011年3月。

- 4) Andrea Paar, *Der österreichische Verlagsbuchhandel auf Buchmessen in Leipzig und Wien sowie auf Weltausstellungen von 1850 bis 1930*, Dipl. Wien, 2000
- 5) Ernst Fischer und Stephanie Jacobs (Hrsg.), *Die Welt in Leipzig : Bugra 1914 : Internationale Ausstellung für Buchgewerbe und Graphik 1914*, Maximilian-Gesellschaft, 2014. 本書は、ドイツ国立図書館（ライプツィヒ館）のドイツ書籍・書物美術館（Deutsches Buch- und Schriftmuseum）が2014年にBUGRA 100周年を記念して開催された展示会に併せて出版されたものである。
- 6) 以下のBUGRAに関する叙述は、特に断りの無い場合は、Fischer und Jacobs, *Die Welt in Leipzig*, に依拠している。
- 7) 例えば、文化館の建物や山岳風景鉄道は、万国建築博覧会で建設・敷設されたものを流用している。
- 8) 梶原克彦・奈良岡聰智「第一次世界大戦と在澳日本人の抑留問題（三）」『愛媛大学法文学部論集 社会科学編』45号, 2018年, 9ページ。
- 9) このエピソードは正木直彦（東京美術学校・校長）がBUGRAの顛末について答えた「意外なる独逸の余憤」（『朝日新聞』1914年9月4日）の中で言及されている。
- 10) Paar, op. cit., S. 89-91.
- 11) 「独逸印刷展覧会の怪火－敵国の陳列館皆焼く」『朝日新聞』1914年9月4日。
- 12) 「図書博覧会－今はた如何に」『読売新聞』1914年9月6日。
- 13) 公式ガイドブックでは日本村（Japanisches Dorf）として紹介されている。それによると「小川、橋、様々な日本家屋のある素晴らしい庭園の真ん中には茶室もあり、様々な趣向が凝らしてある。大きな仏像が全体の真ん中に据えてある」との説明があるように、日本庭園というよりも日本のイメージを詰め込んだという意味で「日本村」というに相応しい空間であったと思われる（*Amtlicher Führer durch die Internationale Ausstellung für Buchgewerbe und Graphik Leipzig 1914*, S. 70）。
- 14) *ibid.*, S. 65.
- 15) BUGRAにおける植民地に関する展示の目的は、グローバルな列強としてのドイツの地位を公に示すことにあった。BUGRAでの展示を含むドイツ植民地と建築物との関係については、Itohan Osayimwese, *Colonialism and Modern Architecture in Germany*, University of Pittsburgh Press, 2017, 参照。公式ガイドに掲載された説明は以下の通りである。「この建物[エスペラント館]の隣に設置されてある館には、特別展「ドイツ植民地」と「在外ドイツ人」が収蔵されている。書籍出版業と印刷業が植民地ではほとんど何の役割も果たしていないと思う人の蒙昧はこれらの展示を通じて啓かれる。多彩なかたちで、ほとんどすべての当該地域が網羅されている。カメルーンの展示が最大のそれであり、あらゆる方面で興味深い素材が提供されている。木製の学習板、ペン先状に仕上げられた葦、いわゆるカラム[Kalamu: スワヒリ語でペンの意], カボチャで出来た独特のインク壺、これらがスルタンから諸行政長官(Residentur)への書簡のとともに展示されてある。公立および教会立の学校から、様々な種類の印刷物が提出されている。これらによってカメルーンの学校生活の

様子がわかるだろう。カメルーンと並び、ドイツ領東アフリカとドイツ領南西アフリカも同様に様々に出品している。ここではとりわけスワヒリ語の展示物が目を引くだろう。が、特に様々な光景を目にすることができるようになったのは、様々な布教団、わけでもライプツィヒ布教団が、強い関心をもって植民地部門〔の展示〕をサポートしてくれたおかげである。原住民の教会が棕切妻風の並木入口のある棕櫚の下に設置されており、また布教団の多くの民俗学的な展示物がその光景をきわめて活気づけている。しかし植民地の今日の生活への深い認識は、有名な植民地画家エルンスト・フォルベア (Ernst Vollbehr) の多くの絵画によって得られる。彼はすべてのドイツ植民地を訪れ、旅の途上で多くの素晴らしい絵画を描き、彼はそれらを親にも多くの民俗学的展示物と共に植民地展示を活性化するために提供した。その結果、どの訪問者も、価値ある展示物を送り出してやまない植民地の状況について完全に把握することができる。

同じ建物に設置された特別展「ドイツ精神文化および海外ドイツ人」は、ドイツ人の維持と拡大のために……地球上の個々の領域においてドイツの組織的な精神活動が既に示してきた成果を表している。資料の観点から以下の部門群に分類されている：在外ドイツ人の拡大、在外ドイツ劇場および在外ドイツ芸術、在外ドイツ研究所、在外ドイツ人道活動（さらに布教団および船員宿泊所、ならびに医療活動、とくに救護奉仕団）、そしてドイツ海運、在外ドイツ士官による軍事教育、在外ドイツ銀行およびドイツ工業、在外ドイツ図書館およびドイツ書籍出版業、在外ドイツ新聞およびドイツ印刷業、在外のドイツ人文学、ドイツ協会および協会の建物、ならびにドイツ教会信徒、そしてドイツ通信からなっている。模型、絵画、地図、時刻表、その他の、印刷業および書籍出版業の展示物によって、在外でのドイツの文化的・経済的活動のあらゆるこうした要素が興味深く役立つように描写されている。はじめてこうした展覧というかたちで上記の領域が解明されたことは、非常に道徳的にかつ実践的に有用である。とりわけ、在外ドイツ人の先駆的業績の意義について十分なイメージを持っていない訪問者たちに、この特別展は在外ドイツ人の強大な極めて多岐にわたる文化的価値という考えをもたらす。政治的な性格などというものは展示にとってほど遠いものであり、重要なのは、展示の趣旨は徹底的に学術的なそれであるという点である。すなわち、文化史的、地理学的、民俗学的、経済史的基盤に基づき、展示という形でドイツ学 (Deutschkunde) に貢献する試みである。」(*Amtlicher Führer durch die Internationale Ausstellung für Buchgewerbe und Graphik, Leipzig, 1914*, S. 63-65.)

- 16) *ibid.*, S. 65. 公式カタログでは日本・朝鮮部門の詳細を以下のように説明している。「中国と中央アジアに引き続き、朝鮮・日本部門があり、ここには1790年頃の江戸における歌麿の版元問屋の店舗が設置されている。最初の活字型の故郷である朝鮮は、日本と中国を結び付ける文化の懸け橋に位置している。朝鮮活字史の内容は一連の古い印刷と印刷機器によって具体的に説明されている。きわめて繊細で芸術的な直観と形態の国である日本それ自体は、その活字技術と印刷技術——そのなかでも16世紀末の天草のイエズス会印刷所の印刷物が極めて興味深い——のほかに、とくに、きわめて素朴でモダンな芸術である多色刷り版画の、入念に選定された発展経緯からも〔展示が〕構成されており、中国

部門での展示と類似の配置で東アジアの光景を完成する。小特別グループである「琉球文化（Riukiu=Insel=Kultur）」は、有益であると同時に興味深い補完となっており、こうした日本の南端群島の文化的独自性を示している。」（*Amtlicher Führer durch die Internationale Ausstellung für Buchgewerbe und Graphik, Leipzig, 1914*, S. 38）

- 17) 「図書博覧会－今はた如何に」『読売新聞』1914年9月5日。
- 18) 文化館のこと。
- 19) 「図書博覧会－今はた如何に」『読売新聞』1914年9月6日。